１．はじめに

奈良国立文化財研究所（当時）は大和平野農業用水導水路工事予定線上の遺跡の調査事業として、1955年の航空写真撮影と地図作成につづき、飛鳥寺跡の発掘調査を1956、1957年に行った。その結果、予想を裏切る一塔三金堂の特異な伽藍配置が明らかになり、塔心礎の埋納品をはじめとする数多くの遺物が出土した。調査翌年には発掘調査報告書（奈文研1958）が刊行された。文献史料だけでなく出土品、伽藍配置などからも朝鮮半島との関係がうかがわれ、古代東アジアの文化交流の実態を示す資料である。

これまで飛鳥資料館では、出土品の主要なものを常設展示するとともに、1986年の「飛鳥寺」展、2013年の「飛鳥寺2013」展などにおいて、出土品とともに関連資料や研究の進展を紹介してきた。また飛鳥資料館以外でも1972年の「飛鳥」展、2002年の「飛鳥・藤原京」展などに出土品が出陳された。

飛鳥寺は我が国で最も古い本格的な寺院とされる。『日本書紀』によると、崇峻天皇元年（588）に百済国から仏舎利が献られ、僧とともに寺工、鑪盤博士、瓦博士、画工といった寺院建立に関わる技術者達が渡来した。飛鳥衣縫造の祖樹葉の家を壊して､法興寺を造ったと記される。この法興寺が飛鳥寺のことである。推古天皇元年（593）正月15日、塔心礎に舎利が埋納され、翌日に心柱が立てられた。

飛鳥寺の造営は蘇我馬子が主導し、百済から派遣された技術者や僧侶が関わっていた。それとともに丈六仏の造営には高句麗から黄金が送られており、百済だけでなく諸国からの援助があったことがうかがえる。

飛鳥寺の塔は建久７年（1196）の落雷で焼失し、翌年に舎利が掘り出された。

塔跡を発掘調査した第３次調査では、塔基壇の中心部、現地表下60㎝で鎌倉時代に埋納された舎利容器と石櫃を、さらに下層で心礎と当初のものと考えられる埋納品を掘り出した。心礎は現地表下2.7ｍに位置する。塔の基壇は削平を受けているので、本来はさらに深かったと考えられる。舎利孔内の龕状部分には建久に納めた灯明皿があった。

建久の新造とみられている舎利容器を納めた石櫃は、不整形な花崗岩で、上下それぞれの石にうがたれた円錐状の穴をあわせて舎利を納める空間としていた。舎利容器は小さな木箱におさめられ、その木箱に墨書で由来が記されていた。石櫃には舎利容器と木箱のほか、当初の埋納品を回収したとみられる玉類、瓔珞などが収められていた。舎利容器の検出状況は、報告書の調査日誌に「３寸角の四角い木箱で周囲並びに底部に玉、瓔珞等を敷く。」と記されている。これら回収された玉類や瓔珞は、もともとは心礎中央の舎利孔内に納められた、舎利荘厳具であろう。心礎上面の周縁には当初埋納時の位置を保つとみられる挂甲、蛇行状鉄器、馬鈴、金銅製飾金具、砥石状石製品、玉類などが残っていた。心礎周縁にある品々は立柱後に置かれたものであろうから、儀礼に伴う奉献品と考えられる。そのほかに心礎上面では、建久の埋土とされる木炭に混じって耳環、金・銀の延板・小粒、玉類、刀子などが散乱していた。これらは建久８年に舎利を掘り出した時に取りこぼしたものと考えられており、本来舎利孔に納められていたのか、心礎上面に置かれていたのかはわからない。またガラスや金･銀の小壺といった、当初の舎利容器と考えうるものも出土しておらず、建久年間に掘り出された埋納品（「本元興寺塔下掘出御舎利縁起」は舎利百余粒と金銀器物等と記す）がどの程度再埋納されたのかも不明である。一方、これまで考えられていないとはいえ、石櫃の再埋納時に新しい荘厳具を追加した可能性も絶無とはいえない。

遺物の数量は報告書によると、金銅製舎利容器と木箱、石櫃を除くと、玉類（勾玉４、管玉５、切子玉２、銀製空玉３、銀製山梔玉１、赤瑪瑙製丸玉１、トンボ玉３、ガラス小玉2,366）、金鐶23以上、金銀（金延板７、金小粒１、銀延板５、銀小粒７）、金銅製打出金具（円形金具14、杏葉形金具28以上）、その他金銅製品（鍔付半球形金具７以上、鈴７、瓔珞146以上）、馬鈴１、挂甲１、蛇行状鉄器１、刀子12、雲母片数点、大理石製砥石状石製品１である。ただし報告書には一部未整理と記載があり、金属製品や玉類の細かい残欠が多数あるので、接合関係などを詳細に整理すれば器種・員数は変更される可能性がある。

飛鳥資料館では所蔵品の整理と調査研究を順次行っており、その一環として今回、飛鳥寺の塔心礎出土品に含まれるガラス玉類について分析を行った。ガラス玉類は埋納年代が押さえられる点で基準となる資料群

であり、古墳時代と飛鳥時代の境目に位置する飛鳥寺のガラスの実態が明らかになれば、前後の時代の研究にも資するであろう。

また近年、日本や韓国での発掘調査の進展とともに塔心礎出土品にあらためて注目が集まっている。韓国では扶余の王興寺塔跡や益山の弥勒寺西塔から舎利容器と荘厳具が出土した。これら舎利荘厳具には多数のガラス玉をはじめとする玉類、金鐶、装身具類、刀子、金板、雲母など、飛鳥寺と共通する要素が多くみられる。その一方で、飛鳥寺塔心礎出土馬具については加耶系馬具を製作する倭の工房との関係も考えられている（諫早 2015）。塔心礎出土品は後期古墳の副葬品との類似性が強調されていたが、百済の舎利埋納儀礼はもちろん、朝鮮半島諸地域と列島内のさまざまな要素を視野に入れて検討する必要があろう。